

無能呼ばわりされたので
八年間の恋を捨てます

character

ルージュ・アザール

由緒正しく裕福な伯爵家の令嬢。
献身的で愛情深い性格。
それが災いして婚約者からの
冷遇に耐えていたが、
ある出来事をきっかけに、
決別することを選ぶ。

テンタシオン・ウィクトル

大公家の嫡男。ルージュとは母同士が友人。
女性に興味を示さないことで有名だったが、
ルージュとは好みや価値観が近いこともあり、
急速に心を通わせていく。

メーデア・フリーツシュ

侯爵家の当主付きの秘書。
準男爵令嬢。——
アルベルトからの寵愛を
笠に着る言動が多い。

イリア・シューデン

テンタシオンの乳母の娘。
伯爵令嬢。
テンタシオンを兄同然に
慕うように見えたが……

アルベルト・マルグリス

ルージュの幼馴染みで婚約者。
侯爵家の若き当主。
女性に思わせぶりの態度を
取りがちでやや傲慢。

ルージユの婚約者であるアルベルトは、美青年だ。貴族らしい綺麗なブロンドの髪に、同じく美人と評判の母親によく似て整った顔は、たとえ将来を誓った相手がいようと女性達を夢中にさせる。

そんな彼が女性に思わせぶりの態度を取ることは今まで目を瞑^{つむ}ってきたし、約束をすっぱかされたのだから今日が初めてというわけではない。だが、物事には限度がある。

この国の貴族御用達の格調高いレストランで、せめて個室で良かったと、向かいの空席を見ながらルージユは溜息をついた。

忙しい彼はよく食事を摂り忘れる。だからこうして約束の時間に彼が来ないことなど八年も経てばもう慣れたものだと思いきや平気なフリをしていたが、本当は気付いている。

ただ忙しいだけが理由ではないことに。

若くして引き継いだ侯爵家の事業や執務が多忙なのだともルージユとはもう長らくまともな会話をさせていないが、社交の場ではご婦人や令嬢と和やかな会話を長く続け、会食に誘われれば常に快諾して秘書を伴って向かう。そしてその彼の秘書は、まだ若く未婚の女性である。

それでもルージユは幼馴染でもあるアルベルトを信じ愛していた。

——そう、愛していたのだ。

一人で食事を済ませ、ウェイターに告げる。

「今日も美味しかったわ。持ち帰れる軽食を二人分包んでもらえるかしら？」

「かしこまりました」

馴染みのウェイターはルージュの言葉にもう不思議そうな顔をしなくなった。

ルージュもまた、料理を褒めたり店員を労ったりする姿が想像できない最近のアルベルトを思えば、来ない方が良くのかもしれないとすら思う。

「今日は少しだけ、豪華にして欲しいの。急に頼んで申し訳ないけれど、出来るかしら？」

「え……、可能ですが、よろしいのですか？」

「ええ。特別な日だから」

少し驚いた様子のウェイターは、このランチが誰の分なのか知っているのだろう。

心配そうな表情に実直さを感じて好ましく思う。目の前のウェイターだけでなく、この店の店員は誰もが、口が堅く余計なことは言わないが差し出がましくならない程度に気遣いの言葉を挟んでくれる良い人達ばかりだ。

それがいつもこの店を選ぶ理由のひとつでもあった。

そしてそんな素晴らしい店の軽食を、結果的に無駄にしまったことがあった。

アルベルトが外食の約束をすっぱかすたび、きっと食事も摂らずに執務室に引きこもっているの

だろうと差し入れとして軽食を手渡していたのだが、ある時その軽食をルージュに投げつけてきたのだ。

『たった一人分の差し入れとは嫌味のつもりか!?』

『ど、どうして？ そんなつもりじゃ……』

『メーデアは早朝から夜遅くまで共に頑張ってくれている。彼女を差し置いて一人で食えと言うのか!?』

メーデア、とは秘書の名前だ。

彼の隣でわざとらしく申し訳なさそうにする彼女は、執務にふさわしいものか怪しいタイトなドレスを着て、大きな胸をアルベルトの肩に押し付けると、これみよがしに彼の頬に手を添えて宥めた。

『いいんです、アルベルト様。仕事とはいえ、婚約者であるルージュ様のお立場でしたら、私が入らなくて当たり前です……』

『なんて狭量な。すまないなメーデア、外に食事しに行こう』

『待って、アル……!!』

それが、ランチを二人分、持ち帰るようになったきっかけだった。

狭量な婚約者だと思われたくない。

少しでも彼の役に立ちたい。

メーデアと二人きりで食事に行かないで欲しい。

そんな複雑な思いから、まるで召使いのように、アルベルトとメーデアの仕事のサポートをするようになるまで、そう時間はかからなかった。

何を差し入れるにも二人分、どこを予約するのにも二人分……

労いや感謝の言葉はなくルージュの席が用意されることもない。

それでもアルベルトの役に立てるならばと何でもした。

今は侯爵家の事業に人手が足りていない。方針さえ指示すれば複数人分の働きを見せる馬力のあるメーデアを手放せない。だから、細かい気遣いは出来ても底力で劣るルージュより彼女が優先されるだけ。

いつか余裕が出来たら、あの時は大変だったねと向かい合って食事をする日が来るのだと信じていた。

けれど昨日、執務の都合で少し早めにランチの差し入れを持って行った時、ルージュは聞いてしまった。

二人の、荒い息遣いを。

何をしていたかなんて扉を開かなくても分かった。百歩譲ってやっていたことは誤解でも、扉越しにでも分かるほど、彼らの声は甘く、親密な様子だった。

ショックでその場を動けなくなってしまったルージュに追い討ちをかけたのはその後の二人の会

話だ。

『もうすぐルージュ様が来るんじゃない？』

『来たところで別に問題ないさ』

『こんな事、知ったら悲しみますよ』

『どうせ、アイツは俺の言う事ならなんだって聞く』

悪びれもないアルベルトの声色はどこかルージュを小馬鹿にしたようにも聞こえた。

『それなら、今度三人でするのはどうでしょう？』

『悪くないが、普通は嫌がるもんじゃないのか？』

『私は寧ろ見せつけたいのです。貴方のその蕩けた顔を』

『そうか。ルージュはきつと断らない。俺を欲してプライドなんて放り捨てるさ、今までみたいにな』

それ以上は聞いていられず、ようやく動けるようになった足を無理矢理動かして走り去った。それでも、二人の笑い声が暫く頭から離れなかった。

侯爵家の侍女に何と言って屋敷を去ったのか覚えていない。アルベルトに関係がある誰も彼もが、自分を嘲っているように思えてしまう。

その日は執務の所為で食事を届けられなかった事にして、夜通し泣いた。

そして、ルージュはやつと八年間の想いを捨てたのだ。

いつもよりも豪華にしたランチは少し重い。

この荷物をあの執務室に下ろした瞬間に八年間の恋の荷も下りるのだろうとルージュは小さく笑った。

一晩経って落ち着けば、侯爵邸の使用人達の全員がルージュを侮っている訳ではないと考えを改められる。

アルベルトに近しい者や仕えて間もない者、年若い者たちは彼に迎合してルージュを軽んじていた。まるでメーデアこそ彼の婚約者であるかのように扱う者までいた始末だ。

しかし、古くから居る者達は皆、ルージュが不憚で仕方ないと親切にしてくれていた。

今日の差し入れの時間、少しでいいからメーデアをアルベルトから離してほしいと頼んだルージュに、何も聞かず頷いてくれた執事長のセントリックもその一人だ。

彼と数名の侍女達に協力して貰って、メーデアは今、外出が必要な業務に出ている。できれば最後くらい彼女の顔を見ないでおきたいのと、その方が都合がいいからだ。

「これに目を通す事もないでしょうね、彼は」

それでこそ都合なのだと二人の婚約を白紙に戻すための書類——この国ではこの書類も広義で離縁状と呼ばれる——を一枚、執事長からあえてお使いを頼まれた書類に紛れ込ませた。

(セントリック達にとっては、仕える家や当主を裏切るも同然の行為でしょうに……みんな、あり

がとう)

慣れたこの邸にももう来る事はないだろう。

ルージュとの別れを惜しんで涙を流してくれたアルベルトの乳母……ルージュとアルベルトが結婚したら、子育てを終えた彼女が育児の指揮をとってくれるはずだった……の目が腫れていることにもきつとアルベルトは気づかない。

「アル、失礼するわね。あなた達のランチと頼まれていた書類を頂いてきたわ」

「ああ、置いておいてくれ」

「この書類、すぐにサインが欲しいみたいよ？」

いつも通りを心掛けて申し訳なさそうに離縁状を紛れ込ませた書類の束を差し出す。

少しこちらを睨んだアルベルトは「今はメーデアが不在で持つて行く者がいない」と面倒そうに返してくる。思えば、忙しい忙しいと言いながら、ここ最近の彼は執務をメーデアとルージュに任せてばかりだった。

そして、メーデアの書類仕事は正確だ。彼女の手へ渡れば間違いなく離縁状を見咎めるだろう。

メーデアからしてみればルージュ達の婚約解消は好都合、と見逃すかもしれないが、早く確実に終わらせてしまいたい。

彼女はルージュとアルベルトを二人きりにさせまいと急いで帰ってくるだろう。

「それなら帰るついでにまた各部署に返しておくわ」

「珍しく気が利くな」

今までのルージュならこんな心の籠らない言葉でさえも、役に立てたと喜んだだろう。けれど、今は書類を読むこともせずにサインする彼の考えていることなどお見通しだ。

「ルージュに預けられる書類なら、大して重要じゃない」と思っているのだ。そして自分とメーデアがそういう振る舞いをするから、侯爵家の若い部下達がルージュを見下し侮っているのだというのに、ルージュが無能な所為だと内心鼻で笑っているのだろう。

大した確認もせずにアルベルトがひと通りのサインを終える。ルージュはきちんと抜け洩れがないことを確認して書類を受け取ると、急いで鞆にしまった。

そこで軽いノックの後、まるで自室への帰宅を告げるような気安い声をする。

「ただいま戻りました、アルベルト様」

メーデアだ。いつもよりどこか身なりが整いきれていないのは、業務から少しでも早く帰って来ようとしたからか。

彼女にもいつも通りを装って軽く挨拶をすると、さりげなさを装ってルージュ達に観察の目が向けられる。自分がここで逢瀬を重ねているから、アルベルトが二枚舌でルージュと二人きりのときはルージュと甘い時間を、などと疑ったのかもしれない。

相変わらず執務机を挟んだルージュ達の距離に、メーデアは安堵した様子で口角を上げた。

「ご苦労だったメーデア」



「はい。少しでも早くお顔を見れるように頑張りましたのよ？」

「はは、ルージュもこれくらいの可愛げを見習ってはどうか？」

返事をせずににこりと微笑むだけのルージュにメーデアは一瞬つまらなそうな顔をした。自分は嫉妬しているのにルージュは、といったところか。

一晩中思いきり泣いたおかげか、長年の心の負担から解放される安堵からか、今のルージュは不思議と、腹が立つこともアルベルトの言葉に傷つくこともなかった。

それどころか穏やかに微笑んでみせる余裕さえある。

「今日は少し豪華なランチにしたのよ、良かったら二人で召し上がって」

そこでようやく何かを感じたのか、アルベルトが珍しくルージュに視線を向ける。

しかし、彼女が首を傾げると「いや、今日は本当に気が利くな」と誤魔化すようにすぐに視線を机の上に戻した。

それが面白くなかったのか、メーデアが「そうだわ」と手を軽く叩いてアルベルトに耳打ちをした。すると彼は頷いてからにやりと笑う。メーデアも似たような顔をして、ルージュに向き直った。「ありがとうございますルージュ様。いつもよくしていただいて……よろしければお礼に、今度三人で湖の別荘に行きませんか？」

その言葉に昨日の二人の会話を思い出す。

見せつけよう、だなんてもう、アルベルトへの想いには区切りをつけたから無意味な話だし、

ルージュは勿論そんなことをするつもりはない。

そもそも、湖の別荘はアルベルトではなくルージュの別荘だ。お礼と呼ぶには全てがちぐはぐさる。

「しばらく行っていないから、管理を任せている者に状態を確認してみるわ」

行くとは返事をしない。自分を騙し続けていた相手であっても、嘘をつきたくはないからだ。

思い通りにさせてたまるかとアルベルトへ怒りの籠った微笑みを向ける。

「じゃあ、邪魔にならないうちに帰るわね」

「……ルージュ？」

アルベルトが思わずといった調子で引き止めるように呼び掛けるが、すぐにメーデアを見て、「いや、何でもなし。勝手にしろ」とまた書類に目を戻した。

（メーデアに誤解させたくない、といったところかしら。彼女には気を遣うのね）

「ええ……さようなら。アル」

そうしてボタンと扉が閉まる。ルージュにしては僅かに荒い所作であったことも相まって、いつもと雰囲気が違うルージュの言葉にアルベルトは今度こそ首をかしげる。

「さようなら……？」

理由こそ見つからないが確かな違和感。

けれど、耳元で囁かれるルージュより少し低めの色っぽい声に思考を拐われてしまう。

「『二人で』、楽しみですね」

「……ああ」

「いっぱい見せつけて下さいね？」

今日はやけに気が利いていたし、機嫌が良かったか何かだろうと深く考えることをやめ、アルベルトはメーディアの唇に噛み付くように口付けた。

（どうせルージュは、何をしたって俺から離れていかない）

そんな傲慢な考えを、ルージュが屋敷を離れる時まで抱き続けたまま。

ルージュが離縁状にサインをさせてから十日後。やっとルージュが執務室に来ないことを不審に思い始めたアルベルトに、執事長のセントリックは眉を寄せた。

アルベルトが子供の頃から仕えているが、彼は昔から傲慢だったわけではない。

ずっと昔、二人がまだ婚約者ではなく幼馴染という関係性だった頃、アルベルトは常にルージュを気遣い大事にしていた。

由緒正しく、その上富豪でもあるルージュの実家は、伯爵家の中でも多くの家門から一目を置かれる名家だ。評判だけでいえば侯爵家と並んでも引けを取らない。

このマルグリス侯爵家もまた由緒正しく、今でこそ同格の家門に比べれば経済的な苦しさはあるが——良くも悪くも無難な対応をするアルベルトの裏で、ルージュが采配を振るい、傾きかける予

兆を見せた侯爵家を立て直してくれたのだが——当時は家門が傾くような問題は何もなかった。

つまり、十歳の頃にアルベルトがルージュへの恋心を自覚し、二年かけて成就させたあの頃、社交界でのふたりは、家柄も本人達の人柄も釣り合いのとれた、お似合いの若い恋人だったのだ。

あの頃の純粋なアルベルトが懐かしいと、執務室でメーディアと情事に耽つてから自分に話しかけてきたのだろう現在の彼にため息をつく。

元々、十代も半ばを過ぎて令嬢達に秋波を送られるようになってから、調子に乗って誤解されかねない言動をするところはあった。けれど、それでもルージュを一番に優先するところはあったし、最低限の分別もついていた。

ルージュを粗末に扱い始めたのは、乳母の遠縁であるメーディアが、侯爵家でアルベルト付きの秘書になってからだ。年の近い異性を秘書として置くことに懸念はあった。だが、当時、爵位を継いだ直後で様々な場所に駆け回り回るアルベルトについていける体力があつて、侯爵家に忠誠を誓っている家の人間が、他にいなかったのだ。当初のメーディアは地味で真面目な女性だったため、油断していたところもある。

それがいつの間にか、メーディアの服装が派手になり、アルベルトが彼女と男女の仲になったと匂わせる言動を繰り返すようになった。責任を感じる乳母やセントリックをルージュは最後まで責めなかったが、その頃には若い使用人達は、主人の寵愛を受けるメーディアに影響されルージュを侮り始めていた。

なんと嘆かわしいことだろうとセントリックは今現在も何ひとつ深く考えずメーデアを侍らせているアルベルトを見る。

「で、ルージュを最近見たか？」

「いえ。暫くお越しになっておりません」

淡々と告げると、アルベルトは少し考える仕草をした後に「気を引きただけだろう」と鼻で笑ってメーデアの肩を抱く。

「アルベルト様ったら。今日はもうお仕事に集中なさって下さい」

「つれないな。ああセントリック、一応ルージュに適当な花でも贈っておいてくれ」

機嫌がどうこうとか、気を引く引かないとか、そういった局面は過ぎ去っている。

そろそろ離縁状が受理される頃だろう。逆に言えば、今が婚約解消を取り消す最後のタイミングだろう。アルベルトが現状を理解して駆け込んだきたなら、侯爵家に忠誠と情のあるセントリックは、ルージュの今までの苦勞を分かっているアルベルトに全て話してしまったかもしれない。

いや、今でも幼い頃から見守り仕えてきたアルベルトに隠し事をしているのは心が痛む。だが、この調子ならアルベルトが傷つく事はないだろうし、ルージュの為にも両家の為にもこれで良かったのだと胸の痛みを振り切った。

「お言葉ですが、必要ないかと」

「ん……？ セントリック、珍しいな」

他の使用人達がどれほどルージュを馬鹿にしてもセントリックはいつもそれを諫めていた。

古くからの侍女や乳母、そしてセントリックはいつも彼女の肩を持ったというのに……

違和感を覚えたものの、アルベルトの思考を遮ったのはメーデアの少し嬉しそうな声だった。

「まあ、セントリックさんもやっと分かってくれたのね」

「と、いいますと？」

「皆わざとルージュ様を悪く言うんじゃないんです。あまりにもルージュ様ったら……」

「メーデア、いい。ルージュが温室育ちで無能なのは俺も分かっている」

メーデアに流され「セントリックにも愛想をつかされたか」などとのたまうアルベルトの横で、メーデアがニタリと笑ったことにセントリックは気づいていた。

愛想をつかされたのはこちらの方で、「必要ない」というのはもうそんな事をしてもルージュは戻ってこないからだ。だと言うのに、まるで全てを分かっていると言いたげなアルベルトの態度に、セントリックは最後の情すら失いそうになる。

いや、いつそアルベルトへの情は捨て、侯爵家がこの婚約解消で受ける影響のことだけ考えて立ち回ったほうが良いか。

今セントリックが告げたところでアルベルトは真面目に取り合わない。婚約解消が正式に受理され、ルージュに新たな婚約者でも決まればおのずと書面によって理解することだろう。

『あまり大きな騒ぎにせず、静かに去りたいの』

疲れ果てたように言ったルージュを思い出してセントリックは口を閉ざした。

「ところで、ランチはどうなさいますか？」

「ああ、メーデア、今日は君が買ってきてくれ」

「今日も、ですよ。アルベルト様」

不服そうなメーデアにアルベルトは眉尻を下げて困ったように再度「頼むよ」と言う。

「クリンジア侯爵家がどうも今回の取引を急に渋ってな」

「まあ、大変なのですね？」

「しばらく忙しくなりそうなんだ」

それならばとランチを買いに出かけたメーデアを眺めながら、セントリックは再度溜息をつく。

察しのいい家が、取引を渋り始めた。

社交パーティーや行事ごと、ボランティア活動などでルージュが侯爵家の事業に貢献していたものはどれほど多いだろうか？

確かに馬力という意味ではルージュはメーデアに劣る。彼女自身が伯爵家で持つ執務もある為にアルベルトに付いて周ることはできないし、書類の確認作業の速さではメーデアに軍配が上がるだろう。

しかし、ルージュには事業を進めるうえで大事な、柔軟な対応と気配り、自然と相手を味方に引き込む振る舞いがあった。

実家が富豪だけでなく、彼女自身が事業家としても才能を見せるルージュの影響力と後ろ盾がどれほど取引の力添えになっていたのだろうか？

彼女という人柄がどれほど多くの人達を集めているのか、親しみやすいからこそ忘れがちであるが彼女の美貌がどれほどの男達の心を動かすのか、それをアルベルトは当たり前前に享受しながら、自分一人の手柄だと今も思っているのだ。

「それでは私は失礼いたします」

「ああ。忙しいのにすまないなセントリック」

アルベルトに思うところがあるのは初めてではない。だが、アルベルトがこの家の若き当主なのだと、悪い意味で強く感じたのはこれが初めてだ。

セントリックは長年仕えるこの邸の行く先に強く不安を覚えた。

ルージュが侯爵邸へ通わなくなってもうすぐひと月が経つ。

アルベルトからは義務で定期的に送られて来るいつもの手紙が一通来ただけだ。

この様子だとセントリック達は相当上手くやってくれたらしい。あるいは、アルベルト達がルージュを余程の無能だと侮っているのだろう。

今日のルージュは、実家のアザール伯爵家の長女として、古くから母同士が友人だと言うウィクトル大公家の登城と首都滞在を歓迎するパーティーに参加している。

国王の双子の弟でもあるウィクトル大公は、アザール伯爵夫人の親友で隣国の第三王女だったリシエールを娶り、広大なウィクトル公国から減多に出てこない愛妻家で穏やかな人だ。

近々嫡男のテンタシオンに爵位を継がせると専らの噂で、今回の登城もその為の顔見せだろうとされていた。

「大公様にお会いするのは久々だな」

「リシーに会えるのが楽しみだわ」

ルージュの両親はアルベルトとの婚約解消に何も言わず、むしろ安堵したような様子であっさりとサインをくれた。

白紙という言葉通り、初めから何もなかったようにアルベルトの話を出すことすら無かった上に、大きな騒ぎを起こさず静かに侯爵家を支援する事業の全てから手を引いた。

そんな二人は今日、ウィクトル大公夫妻に会うのが待ち遠しくて仕方がない様子だ。

「あなたもテンタシオン公子に会うのは久しぶりね」

「え？」

「ふふ、覚えてないかしら。二人とも赤ちゃんだったものね」

どうやらお互いに本当に覚えていられないほど幼い頃に顔合わせをしたことがあるらしい。アルベルトよりも先に会っていた同年代の異性がいた、というのはなんだか実感が湧かない。

実感といえば、婚約を解消したことで、母からは良いご縁があれば積極的に望んでもいいのよ、

と言われたこともそうだ。併せて、テンタシオンが登城することで社交界では令嬢達の目がガラガラと輝いているという話を聞かされたが、俗な言い方をすれば他の女性に負けて婚約解消になったような身、しかも八年もの間婚約していた末のことなのだから、世間的には「傷物」同然だろうと、無縁な話だと母の話を聞き流していた。

先ほどから痛いほどに向けられる視線はきつと、同伴者がいないせいだろう。

「――ルージュ嬢？ ルージュ・アザール伯爵令嬢でよろしいだろうか」

「はい」

突然名前を呼ばれて振り返ると、王家以外では珍しい、深い海を閉じ込めたような深碧の瞳が自分をみつめていた。黒い髪が短く整えられて爽やかな印象なのに、どこか色香のただよう美青年だ。

「失礼、私はテンタシオン・ウィクトルと申します」

本当の初対面は、どちらも記憶に残すには幼すぎた。

だから、ルージュとテンタシオンにとって、この瞬間が互いに『初めて会った日』だった。

「ルージュ・アザールです。公子様」

礼儀正しく優雅な礼が返される。さらりと白い肩を滑り落ちるワインレッドの髪に、静かに燃える意志の強そうなヘーゼルの瞳。一目見てテンタシオンはルージュに釘付けになった。しかしそれを表に出さず微笑む。

「はじめまして、と言うべきでしょうか？」

そして、他の令嬢達と違い、ひとつも熱を持たない彼女の瞳や頬を見て少しだけ落胆する。

両親がまだ公にされていないルージュの離縁を知って、慌てて自分と彼女を会わせようとわざわざ首都に連れてきた時は、どうせ令嬢など似たような反応、似たような者ばかりだろうと期待していなかった。

だが、彼女を知った今では、むしろ頬を染めてくれれば良かったのと思ってしまう。

「ふふ、どうやら初めてではないようですね」

自分に見惚れることなく視線を外し、まるで十代の娘のように再会を喜ぶ母達を見て、微笑ましそうに笑うルージュ。そのまま二言三言話したら離れていってしまいそうで、テンタシオンは思わず慌てて提案した。

「よければ今日は私が貴女をエスコートしても？」

「私を、ですか？」

まさか、何故自分を、と言いたげに首を傾げるその仕草さえも愛らしく思うと同時に、本気で不思議がっている様子のルージュに驚く。

男たちの熱い視線や令嬢達からの羨望の視線に、気付かないふりをしているのではなく、本当に気付いていないようで、どこか放っておけない危うさを感じた。

けれどそんな彼女の無欲さがさらに人々からの好感を集めているのだろう。

そう分析しつつこの短時間で既に好意を持っている自分も単純なものだと少し笑いながら、テンタシオンは続ける。

「ええ、ルージュと呼んでも？」

「はい。好きに呼んで下さって結構です」

不思議そうに、けれど警戒した様子のないルージュに安堵しながら、テンタシオンは周囲に見せつけるように彼女の手の甲に口付けた。

（確かに、これは急いで手に入れないとすぐに奪われてしまいそうだな）

——偶然か、ルージュとの婚約を願うテンタシオンの両親による根回しか、領地への視察と重なりパーティーに参加出来なかったアルベルトが、この日のエスコートについて知るの、メーデアと熱い視察の夜を六回ほど過ごした後だった。

「大公がエスコートだと？」

「まあ、他の男を勾わせて気を引きたいのですね」

「はっ！俺とルージュは幼馴染だ。奴らの母親同士が友人だということくらい知ってるさ」

こうした油断と自惚れがテンタシオンにとってはコトを静かに進めるのに大変有利だということをこの二人はまだ知らない。

アルベルトが「ルージュは自分の気を引きたくて母親の人脈を頼って騒いでいるのだ」と油断し

嘲笑っている間にも、ルージュはテンタシオンと会う機会が増えていた。

「あ……よく会いますね」

「ルージュ、今日も会えて嬉しいよ」

穏やかな深い碧眼が緩む。まるで昔からの親友に会ったかのように当たり前に隣の席を引いたテンタシオンは、その席に座るようにルージュに促した。

大公家が首都に来てからしばらく経つが、ルージュが婚約を解消してから、自分自身で手掛け始めた事業と伯爵令嬢としての執務との間に作っている趣味の時間には、必ずと言っていいほどテンタシオンに遭遇している。

（よほど気が合うのかしら？）

まあ両親同士があればほど意気投合しているのだから自分たちも気が合ってもおかしくはないかと深く考えることはしなかったが、近頃あまりにも多くテンタシオンと時間を共有している。

好きな本の作者が同じだったり、領地経営など仕事に向き合う面での価値観が似通っていたり、とにかく話がよく合った。

アルベルトともここ数年はこれほど沢山話したことはなかった上に、自分に異性の友人ができるとも思っていなかったルージュはとても不思議な気分だったが楽しかった。

「首都にはいつごろまでいらっしゃるのですか？」

「両親の用事が終わり次第戻る予定ですよ」

ふわりと笑ったテンタシオンにほぼ毎日会っている所為か、近頃は少し帰る時が寂しくなってしまうていた。そのため、自分でも珍しいことだと思いつながら、ルージュの方から食事に誘った。

「そうですか……。でしたら、その、よければこの後ランチしませんか？　こちらにおられる間に一度、一緒に食事をおもてなしてみたい」

「えっ？」

「あ……ご迷惑でしたら」

「いや！　是非、行きたい！」

珍しく碎けた口調で、慌ててテンタシオンが被せてくる。もしかしたら彼も少し寂しさを感じてくれているのかもしれないとルージュは嬉しさを顔に滲ませて頷いた。

「行きつけのレストランがあるんです」

そう言って向かったいつものレストランで、一人ではなく二人で来たのは初めてだと考えながら、目の前で穏やかに前茶を啜るテンタシオンを眺める。

アルベルトもかなりの美青年だが、テンタシオンはそれをはるかに凌ぐ美しさだ。

洗練された所作と穏やかな口調が彼を理知的に見せており、無理に彼の見た目へ皮肉を言おうとするなら、武芸には向いていなそうな、という印象になるかもしれない。

しかし、気安い場得上着を脱ぐと分かる体格は、細身なのにしっかりと鍛錬されたものだ

更に、領地や事業への経営の才覚は、ここ数日の対話だけでも十分に伝わってくる。

今の所人柄もどこにも問題がないように見えるし、こんなにも魅力的ならば令嬢達が放っておかないはずだ。

すっかりと彼に好感を持つルージュは、自分がテンタシオンの婚約者候補の筆頭に名を連ねていることも知らず、まるで友人の世話を焼くような気分で尋ねた。

「公子様、他のご令嬢達とはお話になりましたか？」

「ああ勿論。皆貴女のことを褒めちぎっていましたよ」

（気になる子はいたかという意味だったのだけれど……）

何故か褒められた本人でもないのに嬉しそうなテンタシオンは、今度は自分の番だとルージュに質問する。

「ルージュは？ 最近同年代の異性とは会いましたか？」

「公子様だけですわ」

こういった何となく合う話のテンポや、噂よりも何を考えているのか分かりやすいテンタシオンとの裏表の無い会話が、ルージュはとても居心地よく、素直に好きだと思った。

「恋人や、新たに婚約をする予定は？」

「ありません」

穏やかな表情と声色でそう言ったルージュに、テンタシオンはこれは手強いなと苦笑する。

「安心しました。悔しくもありますが」

「はい？ どういう意味ですか？」

「いえ、この話は日を改めて。そういえば、元婚約者の方からは何も？」

「ああ……、別荘の件はどうなっているのか、と私的な用件だけを伝える手紙に、気を引きたいなら意地をはるなと書いてありました」

くすくすと笑うルージュの声音が「婚約が解消されたことにも気付いていないなんて」と呟いた時だけ少し自嘲するようなものになる。

そんな彼女を慰めるように、テンタシオンがルージュの瞳を見つめながら少し声を落として囁く。「私なら、手紙だけなんて無礼な真似はしません。いえ、そもそも、死んでもあなたを悩ませ手放すようなことはしない」

その言葉に、友人としての励ましだろうと思いついても、ルージュは気恥ずかしくなつて視線を逸らす。

「ところで、別荘とは？」

「ああそれは——」

テンタシオンにならばいいだろうと、彼にあの日のことを話した。説明の最中、時々見える彼の氷のように冷たい瞳がとても恐ろしかったがそれが自分に向けられていないのはよく分かった。

「許せませんね」

始終テンタシオンがルージュよりも遥かに強い怒りを露わにしてくれたからだ。

「未遂でしたし、もう済んだことですのぞ」

「ルージュがそう言うなら仕方ありませんが……」

こうして休憩時間を共に過して、時間が来れば執務にあつさりと戻ることを暫く続けている内に、二人はどうしても互いの顔を見ないと寂しくなるようになってしまった。

かと言って約束をするわけでもない。気が付けばいつも、テンタシオンがルージュのいる所に現れるのだ。

それをルージュはよほど気が合うのだろつと思つていたが、本当はテンタシオンが大公家の力を使つて毎日、彼女の休憩場所を探し当てていた。

テンタシオンがそんな努力を重ねる中、社交界に良くない流れが生まれていた。

既にアルベルトとルージュは正式に婚約を解消しているのだが、社交界によく顔を出すアルベルトが、あくまでルージュはまだ自分の婚約者であるとして振る舞うため、ルージュとテンタシオン、アルベルトとメーデアが、愛人関係にあるように噂され始めたのだ。

ルージュ達はせいぜいお茶をしている程度の目撃情報で、アルベルト達はまるでわざと世間に見せつけるように白昼堂々と体を寄せ合い口づけを交わしているという大きな差があつたのだが、この国では男性側の不貞は嗜みと黙認される傾向が強い一方で、女性側の不貞には厳しい。更に言えば、身分差のある男女の恋は、婚約や婚姻を壊すところまで進まなければ、仕方がないと流される節すらある。つまり、ルージュだけが悪しざまに言われかねない状況だ。

ルージュの名誉を守る為、アルベルトへと何度も正式に婚約解消が済んだと手紙を送っているのだが無視をしているのか見ていないのか、彼からは一向に返事が来る事はなかつた。

それどころか、定期的に義務のように贈られてくる花束には「意地を張ると本当に嫌いになるぞ」と意味のない脅し文句まで添えられている。

「どうして……？」

実は、ルージュが侯爵邸に來なくなつた頃からアルベルトの知らぬ所でマルグリス侯爵家は二つに分裂していた。当主のアルベルトから寵愛を受けるメーデアを支持する者達と、侯爵家を想いメーデアが権力を持ち始めていることを良しとしない者達だ。

そして若い使用人達は皆メーデアに上手く絆されており、アルベルトやメーデアを支持しない者達への隠し事が増えた。

そのうちのひとつが、婚約者であるルージュの立場を悪くする為、メーデアから命じられた、ルージュからの手紙の破棄だ。現状を単なる痴話喧嘩だと思つているメーデアは、仲直りを阻みルージュが不在でいる時間を引き伸ばそうと、ルージュからの手紙はアルベルトに届けないよう命じていたのだが、使用人達が余計な忠誠心を発揮し、伯爵家からの正式な手紙さえ破棄していた。

まともな使用人は、婚約解消後は伯爵家ごと関わりを絶たれるのが当然だと思つていたことも災いして、セントリックが気づくまでにかんりの時間がかつてしまつていた。

手紙を燃やす仕事の流れ作業になり、隠蔽が杜撰になったことで事態に気づけたセントリックは、手紙を処分していた若い使用人を鋭く睨んで尋ねる。

「これは一体、どういうことですか？」

「す、すみません！ アルベルト様が気分を害されている為ルージュ様からの手紙は全て破棄するようにと……」

「一体誰が……いえ、あの方ですね？」

「……はい。メーデア様です」

セントリックは頭を抱えた。

長らく仕えてきたがこれほどまでにまとまりのない侯爵家は初めてだ。

けれども今回に関しては不幸中の幸いかもしれない、とも考えられた。

燃やされた手紙の中身は確認のしようがない。内容を知らずに謝罪してはどうしても軽い印象になり、無礼でしかない。誠心誠意謝るためには恥を承知で伯爵家に連絡を取るしかなく——つまり、セントリックからルージュに連絡をとる大義名分が出来た。

そしてセントリックや乳母達のように侯爵家を本当に想い、ルージュとの八年間を懐かしむ者たちの間では、このまま彼女を失うわけにはいかないとここ暫くの間で再確認していた。

ルージュからのあらゆるサポートを失ったアルベルトは明らかに仕事に支障らず、これまで仕事上手に行っていたのは全てメーデアのおかげだとばかり思っている彼は、突然不調になった原因が

ルージュの不在にあるとは気付いてもいない。

近頃仕事に忙しくて帰れないからと部屋をあてがわれたメーデアは侯爵邸で女主人のように振舞って散財を始めた。

このままでは、侯爵家が沈む。

「手紙の件は私がかします」

「あっありがとうございます!!」

セントリックは恥を忍んでルージュにアドバイスを乞うと決めた。

そして……本来願ってはならないし絶対に自分から口に出してはならないと理解しつつも、ルージュのほうから「侯爵家に戻っても構わない」という言葉が出てくるのであれば、彼女を連れ戻そうと決意する。それはアルベルトを裏切ると決めた時以上に罪悪感を覚える決心ではあったが、執事長として侯爵家そのものを見捨てるわけにはいかなかった。

セントリックは翌日すぐにルージュに手紙を出した。会って話したいという願いに対して、簡潔だが人情味のある文面で快諾の返事がくる。

指定されたのは高位貴族があまり立ち寄る地域では無いが比較的中心部に近い、裕福な平民が集まるリベリ地区のとあるカフェの二階。

指定された日時と場所からもルージュの気遣いを感じてセントリックはさらに申し訳ない気持ちになった。

これから自分がルージュへ話そうとしていることがどれほど無礼なことなのか分かっているからこそだ。

けれど侯爵家で同じように長らく仕えてきた仲間たちを何もせずに路頭に迷わせる訳にもいかず、他の手段がもう今のセントリックには残されていないかった。

「お待ちせしたわ。久しぶりねセントリック」

「いえ、お久しぶりですルージュ様。このように無礼にもお会いしたいなどという手紙を出してしまい申し訳ございません」

「ううん、ちょうど私も聞きたいことがあったの」

眉尻を下げて申し訳無さそうに笑ったルージュ。彼女がまだ幼い頃からよくこの表情をしていた、とそのようなときでもないのに懐かしくなる。

大抵がアルベルトや使用人の失敗を庇ったり、彼女がしなくてもいい遠慮をしたりするときに見せる表情だった。あの日の小さな淑女が大人になり、侯爵夫人として屋敷で幸せそうに笑む日を、心待ちにしていたというのに。

「……相変わらずお優しいんですね。では、ルージュ様のお話を先に。私に話せることであれば、全てお話しします」

変わらないルージュの優しさに、セントリックは自身を恥じる。

(きつと分かっているように来て下さったのだ。……私が一言、戻ってきてくださいと言うことを)

彼女にもうしなくてもいい謝罪をさせてはいけない。

彼女に不要な遠慮や我慢をさせてはいけない。

ルージュの負担にならない範囲だけ助力を請うて、あとはルージュに憂いなく幸せになつて貰う為、全てを終わらせる協力をしようと思ひ直して、セントリックはルージュに向き直る。

「私からの手紙はアルベルトへ届いているかしら？」

「申し訳ありません。それが——」

ひと通りの話を聞いてあまりの侯爵家の荒れた様子にルージュは驚いた表情をしたが、「そんなことだろうと思つた」とも言つた。

「私が手紙を預ければ確実にお渡しすることもできますが……恐れながら、今は時期尚早かと」
アルベルトが今の段階で事実を知れば、間違ひなく暴走するだろう。

ルージュを取り戻すために手段を選ばない可能性も考えられる。

「不名誉なお噂にさぞご不快かと思いますが、まずはルージュ様を守る盾をお立て下さい」

「盾……？」

「はい。出来ることならそれが、本物の愛であればいいのですが」

いくら有能で由緒正しくてもルージュの家門は伯爵家、侯爵家の要求を全て跳ねのけられるとは限らない。

ルージュがアルベルトから逃げ切る一番手っ取り早い方法は、ルージュが正式に新たな婚約相手

を作ることだ。

セントリックには心当たりがあった。噂が本当ならあの方はきつとルージュを放っておかないはずだと。ただの噂で事実無根であるならば……と思っていた数日前の自分を改めて恥じながら、ルージュからは死角となる場所に視線を向ける。

セントリックは、若い頃に韜帯の負傷をするまで騎士の見習いであった。そのため体力や腕力が落ちた今も、気配の察知と偽装を見抜く力には長けていると自負している。

今、ルージュから死角になる方角の少し離れた場所には、一見華奢な青年が一人、誰かを待つふりをしてこちらに意識を向けていた。

（……ご自身で足を運んでルージュ様を守ろうとするほど、大事に想われているんですね）

昔からルージュは恋愛の類の話には疎い。

だからきつと今も自覚していないだろう彼女に向けると同時に、こちらの話に耳を傾けているだろうテンタシオンに向かつても伝えたつもりだった。

その後、セントリックはかつてルージュが中心となつて回していた侯爵家の事業について、いくつか尋ねた。ルージュはそれに答え、今後考えられる問題の解決策も添える。セントリックは頷き、話を締めくくる。

「……セントリック。あなたの話は、それだけでいいの？」

「はい。もういいのです」

これで侯爵家『は』守れる。それだけでいい。

そう言いたげなセントリックを見て、ルージュは安堵しつつも謝罪の言葉を零す。

「何もできなくてごめんなさい」

「何をおっしゃいますか。本来そのように謝罪すべきはこちらの方です。……ルージュ様、どうぞお幸せに」

「ええ。あなた達がいたから八年間頑張れたの。本当よ」

ルージュが笑み崩れる。

懐かしい本来の表情に、セントリックは思わず涙ぐんだ。

この笑顔をまた見られただけで今日は来て良かったのだと確信できた。

ルージュを見送ると、その後を追うように立った男とすれ違う。

その時、セントリックにしか聞こえない程の小さな声で「安心してくれ、必ず幸せにする」と言われた気がした。

ルージュが「セントリック」という男性に会うと知り、こっそり付いてきたテンタシオンは、その男性がマルグリス侯爵邸の執事長だったことに安堵した。

彼はかなり年配の紳士で、優秀だということが見て取れた。

良くないと思いつつも心配も相まって聞き耳を立てている内に、まだルージュが幼い頃から侯爵

家に仕え、ルージュの元婚約者である主の愚行を恥じた上で侯爵家を守るために今回の席を設けたこと、その忠誠心を押しやるほどに彼女を心から心配していることが伝わってきた。

「盾、か……」

ふと無意識に笑みが溢れた。

一見不遜な言い方だが、彼女と心を通わせるきっかけが欲しい自分と、鈍感でこんな事でもないかと頼ってくれないだろうルージュとのどちらもの背中を押す上手い言葉だと思った。

今彼女の頭に浮かぶ未婚の異性はきつとテンタシオン以外にはいないと確信したうえで言葉でもあるはずだ。

だからこそ、『出来ることならそれが、本物の愛であればいいのですが』という言葉が自分に向けられたものなのだという 것도 すぐに気付いた。

テンタシオンの感情を疑っている……というよりも、彼にとつてルージュはもう、長く見守ってきた娘や孫同然なのだろう。

(ははっ、身分を思えば無礼は無礼だが……気持ちのいい人だな)

もちろん、ルージュを幸せにするつもりだ。

それだけはどうしても伝えたくて、思わず彼とすれ違う時、声をかけてしまった。

「安心してくれ、必ず幸せにする」

なぜそんな言動をする気になったのかは自分でもわからない。

けれどルージュを大切に、彼女を心から思ってくれる人が、彼女にとつて一番不遇だった時期にも確かにいたのだということが嬉しくて、心の底から彼女の幸せを願ってやまないのだと態度で訴えかけてくるセントリックに応えたくなくなったのかもしれない。

セントリックに見送られ「少し遠回りしてほしいの」と行者に伝えたルージュを見守る。

今までで溜まった何かを吐き出すように少し長めの溜息を吐いた後、少し自分を責めるような表情をしたルージュは、きつとセントリックが話すことをやめた何かについて考えているのだろう。

今日は声をかけるのはやめよう。

明日の朝になったら何か贈り物を……そうだ、ガーベラの花束を贈ろう。

アルベルトはきつと、ルージュを失った途端に彼女の輝きに気が付くのだろう。

そうなったとて、もうルージュをあのような苦しい場所に返してなどやらない。

ルージュにすぐに好きになつて貰おうだなんて傲慢なことは考えていない。

気の合う友人でも、母親の友人の息子でも、親切な他人でもなんだっていいから、ルージュの近くにいたいと思った。

テンタシオンは改めて自分がルージュに恋をしているのだと自覚し、その感情を心地良く感じる。認めてしまえば覚悟なんて簡単に決まるもので、やるべきことが次々に頭に浮かんで整頓された。ひとまずは自分の権限として仕事を振ることを許されている情報収集担当の従者たちに頼み込む。

「マルグリス家について更に詳しく調べてくれ」

「承知しました。当主付きの秘書については……」

「特に詳しく頼む。ルージュに害がないように動向を見張って欲しい」

こんなことを命じれば、彼らによって報告があげられ、父と母のにやけ顔に出くわすだろうが、そんな気恥ずかしさよりもルージュのことが心配だ。

明日また偶然を装って会いに行つて花を渡せば、少し困つたような顔で礼を伝えてくれるだろうルージュの不器用な表情を想像する。あの笑顔を、壊すわけにはいかない。

出来る手配を全て済ませ、邸に着くと案の定、緩みきつた顔でわざわざ出迎えに来た両親がいた。何か言うべきことがあるんじゃないのかと言いたげな空気に、浅く息を吐く。

自分の判断が正しいか分からない。こんなことは初めてだ。

だが……今を逃してはならないと感じた。

弱みにつけこむようなことになるかもしれない。

つけ込むことすら叶わないかもしれない。

けれど何があるうと、これから起きるどんな事にも一緒に立ち向かう君の味方だと、ルージュに全力で伝えたくて仕方がない。

(なにも見返りなんて求めやしない。いや、求めてもいいなら……君がもう少しだけ表情を緩めて、社交界を渡る事が出来ればいいなと思うんだ)

今までテンタシオンがこんなふうに女性に興味など持つことは無かった。

(けれどルージュ、君には惹かれてしまうんだ)

そんな息子のことなど全てお見通しだとも言いたげな両親に向き合い、ゆっくりと口を開く。

「父上、母上、私は——」

翌朝早く、アザール伯爵邸へ赤いガーベラの花束が届いた。

ルージュは自らの髪よりも遙かに鮮やかなガーベラに、その花に込められた真心を想い見惚れてしまう。その所為か身支度をしてきているメイドのサンの言葉をつい聞き逃してしまい、聞き返した。

「ええと、どなたからだったかしら？」

「ウイクトル公子様です、お嬢様」

「そう……」

余計に心が温かくなった。

テンタシオンから贈られたことと、花言葉——この国では「希望」「前向きな未来」という意味を持つが、赤いガーベラは「秘めた愛」「燃えるような想い」という意味も加わる——を知っていることが原因だった。ルージュはそつとガーベラに触れてふわりと笑うと、その仕草に見惚れるサンの「大切に飾っておいて頂戴」と優しい声で言った。

ここ数年ルージュの哀しげな表情ばかり見ていたサンは、久々に見る彼女のありのままの笑顔にほんの少し目頭が熱くなった。

この邸でルージュを雑に扱うアルベルトを良く思っている者など一人もない。それでも献身的にアルベルトを支えながら伯爵家の仕事も熟すルージュを皆、何かしらの形で支えたいと思っていた。

伯爵夫妻もまた、婚約者となつてから徐々に変わってしまったアルベルトに失望しながらも他ならぬ娘がアルベルトを許し愛しているのならと見守り続けてきた。

だからこそ、ルージュがアルベルトを見限ったこのタイミングでウィクトル大公家が首都へ戻ったことは、とても幸運だったのではないかとサンは思っている。

特にルージュの母親はアルベルトとの決別にとっても安堵していた。貴族にとって愛人関係や政略結婚が当たり前だといえ、娘にはやはり愛し愛される人と幸せになつて欲しいのだとよく言っていたからだ。

アルベルトとの婚約が続いていた頃、そういった家族の想いや、邸の者達の気持ちを感じ取っていたルージュはいつも居心地の悪そうな表情だった。

大好きなルージュの輝くような笑顔にもう二度と陰を落として欲しくない。そんな一心で皆、テナシオンとルージュが上手く行くことを心から願っていた。

「ウィクトル公子様は、お優しい方ですね」

「ええ、とても素晴らしい方だわ」

セントリックと会うことをテナシオンには伝えていなかったが、その件でここ数日考え事が増えていたから、少しでも気分が上向きように、と贈り物をしてくれたのだろう。アルベルトには求めようもない気遣いだ。

今頃まだだらしない格好でメディアと朝を迎えているだろうアルベルトを思い出したルージュは、うっかり元婚約者と友人を比較してしまった事に「失礼なことをしたわ」と律儀に内心で両方に謝罪をした。

テナシオンにはアルベルトという誠実さに天と地ほどの差がある相手と比較してしまったことへの謝罪も含んでいる。アルベルトに対しては口には出さずとも人として無礼なことをしたという単純な謝罪だ。

テナシオンが元気づけてくれたおかげか、気分が良い朝となったルージュは、食堂で父と母が自分以上に機嫌がいい事に気づかなかった。

「ねえ、ルージュ」

「はい」

「お母様からのお使い、お願いできる？」

宛先は「ウィクトル大公邸」、あまりにも重なる偶然に驚きながらも頭の中でスケジュールを整理してから頷いた。

「ええ、ちやうど私も用事があつたので」

何故だかどことなく嬉しそうな両親を特に気にすることもないルージュは何となく食事をする手が早くなっている自分を落ち着かせようと短く息を吐いた。

「まあ、急いで食べて。楽しみなのね？」

母の言葉に驚いて「まさか」と首を傾げるルージュに、父はこほんと咳払いをした後、「テンタシオン公子はいい男だぞ」と独り言のように言った。

「ふふ、公子様に失礼よ。私はもう傷物も同然ですもの」

なんでもないことのように笑うルージュに、彼女の両親は胸が痛むと同時にアルベルトへの怒りを感じた。

けれど、それらもすぐに割り切ることが出来るだろうと二人とも確信している。

本人の意向でルージュには伏せているが、花束と同時に、ウイクトル大公夫妻からアザール伯爵夫妻に、『当家の息子テンタシオンがルージュ嬢との婚約を希望している。令嬢が領いてくれる日が来たら、どうかテンタシオンとの婚約を許して欲しい』という手紙が届いたからだ。

どうやら、これまで全く女性への関心を示さなかったテンタシオンが大公夫妻に自ら「私は、ルージュが好きです」とまるでただの青年のように伝えたらしく、彼女の心を射止める事ができたら婚約を認めて欲しいと言ったそうだ。

アルベルトへの憤りはまだ胸にあるが、今度こそ良縁を掴めそうだとすれば、何でも器用にこな

すと思っていたテンタシオンの意外な一面にも、相変わらず鈍感な自分達の娘にも、なんだか微笑ましく思えてしまう両親なのである。

「まあそう言わず、知ってみなさい」

「お父様ったら……」

困った表情ながらも「でも、よき友人にはなれそうです」と照れた時の癖で視線を逸らして言うルージュを見てさらに二人は上機嫌になった。

食事を終え、ウイクトル大公邸へと向かう準備の為、先に席を立ったルージュを見送った二人は、先程の娘の表情を思い出して言葉をかわす。

「時間の問題ね」

「そうなれば、少しは安心できるんだが」

「上手く整ったとしても、侯爵家は黙ってませんよ、きつと」

「大公家に寄りがかつてばかりいるつもりはないさ。アザールも全力で侯爵家に立ち向かおう」

「ただ、娘の幸せを願う親として。ですよね？」

「もちろんだ」

偶然というにはあまりにも仕組まれているが、今日は探さずとも想い人に会えることに、テンタシオンは素直に感謝することにした。

いつもは昼時の休憩中の間にだけ、ルージュの時間を独り占めする事ができる。けれど今日は母親同士の大した事のない用事のお使いで彼女がこのウィクトル大公家を訪ねてくるらしい。

分かりやすく鼻歌を歌う母とさつきすれ違ったばかりだが、先日のあまりにも格好のつかない自分の宣誓はどうやら両親をとて喜ばせたらしい。早々に両家の両親達が張り切ってテンタシオン達が顔を合わせるきっかけ作りを始めたようだ。

これからのランチタイムはルージュを探すのが簡単になるだろう。本当はそろそろきちんと約束をして会いたいのだが、なんて伝えたらいいのか言葉が出てこない。

これじゃあまるで幼い子供だ。

社交をこなすための言葉ならいくらでも知っているのに、ルージュをスマートに誘う台詞が出てこない。頭の中で試行錯誤しては不恰好な自分が想像できてしまうばかりだった。

そうこうしている間にルージュは母のお使いを終えたようで、嬉しいことにテンタシオンと会いたいと言っていると、使用人が伝えに来てくれた。

「すぐ行く」

鏡で身だしなみの乱れがないか素早く確認してから応接間へと急ぐ。

「ルージュ、お待たせしました」

「いいえ、突然来たのにこんなにも早く来てくださって感謝します」

「うちの母達のお使いでしょう」

「はい。それと私もちょうどテンタシオン様に会いたかったんです」

ルージュがほんの少し眉をひそめて、困ったような表情を見せる。テンタシオンが想像していた通りの不器用な表情だ。機嫌が悪いように受け取れる顔だが、頬と耳の先が少しだけ桃色に染まっているところを見ると、もしかして……

(照れているのか?)

気付いてしまったらもう、なおさら愛おしくて、衝動のままに腕の中に閉じ込めてしまいたいところをぐっと堪えた。

「ガーベラを、ありがとうございます」

「喜んでもらえて良かった。少し唐突すぎるかと思ったのですが」

「とても嬉しかったです。だからどうしても直接あなたにお礼を言いたくなりました」

ふわりと笑ったルージュの表情はいつもの大人びたものではなく、まるで少女のような笑顔で、テンタシオンは心臓どころか身体ごと大きく鼓動しているのではないかと不安になるほど彼女に近づけになってしまう。

「僕も、嬉しいです」

そのためつい零れてしまった言葉は、普段より碎けたものになってしまった。ルージュにもいつもと違う事に気付かれたと、彼女の視線で察し、咳払いで誤魔化す。

しばらく互いに上手い言葉が見つからずに視線を絨毯に落としたが、同時にパツと顔を上げる。

「あの……！」

「ふふ、お先にどうぞ」

「じゃあ私から……」

照れ笑いのルージュも愛らしくて仕方がない。

今言わなければまた勇気を失う気がして、彼女の言葉に甘えて先に話すことにした。

「最近よく会うので、もういつそ僕と毎日食事をしませんか？」

「えっ」

「あつ、いや……よければ、貴女の時間を毎日少しだけ僕にいただけませんか？ ルージュと過ごす昼の時間が毎日楽しみなんです」

結局、頭の中で何度も考え直したスマートな言葉はどれも出てこなかったし、決して上手くも言えなかった。

けれど観念して正直に言ってしまうと、少し驚いたあとにルージュはテンタシオンを嬉しそうに見上げて「私も近ごろ貴方と話すのが楽しみなんです」と笑ってくれた。

顔に熱が集まっているのが自分で分かる。

ほんのり桃色に染まっているルージュの顔よりもきつともっと赤いだろう。

「実は私も同じ事を言おうとしていました」

「そうだったんですか……！」

「だから、違う話にしようと思います」

「はい」

あまりにも可愛くてもうルージュの目をじつと見られないでいるテンタシオンに追い討ちをかけるように、桃色に染まったままの頬ではにかみながら「敬語は無しにしませんか？」と提案して来たルージュにまた心臓が高鳴った。

「では私のことも、テンタシオンと呼んで下さい」

「もう呼んでいますか？」

「様、と付けるでしょう？」

「あ……敬語」

「あつ、ほんとだ」

そこでなんだかおかしくなって、二人で笑った。

しばらく笑って、お茶で喉を潤せば、もう二人は元々付き合いの長い友人だったかのように自然に砕けた口調で話せていた。

薄暗い応接間で項垂^{うなだ}れているアルベルトは、深く息を吸いこんでから長めに吐いた。

自分が侯爵家を執り仕切るようになってから確かに事業は上手く行っていた。美しい秘書を連れ

て、美しい婚約者が待つ自分を皆が羨んでいたし仕事の話をするれば皆二つ返事で投資をした。ところが今日も上手くいかなかった。

たった少しの世間話をしただけで相手の返事は「考えさせて下さい」「持ち帰らせていただきます」となるのだ。

「婚約者様はお元氣ですか？」と尋ねてくるものだから「ルージュとは暫く多忙で会っていません」と答えただけだというのに。

ルージュが妙な意地を張って顔を見せない間、秘書の業務だけでなく、婚約者の代わりまで務めてくれるメーデアは今日もよくやってくれていた筈だ。

だが、この投資の話が上手く行かなければ、ルージュの実家にもそっぽを向かれている今、侯爵家の事業経営は八方塞がりである。

もう一度溜息を吐き、今度は背もたれに持たれて天井を仰いだ。

(そろそろルージュの機嫌でも取っておくか?)

ルージュの実家は指折りの大富豪である上に、ルージュ自身もそのうちの仕事をいくつかこなしている。

こういった時にはやはりいいよりはいたほうがいいのかもしれないし、彼女の実家からの投資はかなり惜しい。

——今になってルージュの替えの利かなさに気づいたアルベルトだが、まだ認識にずれがある。

実際にはアザール伯爵家からの投資だとアルベルトが思っている額も、ルージュが自分で稼いだ分のお金をほんの少し宛てただけだ。

更に、社交界や令嬢同士のお茶会でルージュが個人的に集めた人氣がアルベルトの後ろ盾となっていたのだ。ルージュが何の下心もなく人助けをしたことが返り、ルージュが品格を保ちながらも分け隔てなく接することで得た人氣の恩恵がアルベルトへと影響していたのだ。

一度は傾きかけた侯爵家を立ち直らせたのだから、メーデアの仕事量が助けにこそなっていたが核だったわけではないし、アルベルトに至っては何もしていない。

寧ろ侯爵邸で重きを担う部下達は頼りがいのないアルベルトではなく、いつもルージュを頼った。それなのにアルベルトは、彼を立てて裏で采配を振るっているルージュのことを「毎日差し入れを持つてくるだけで、あとは遊び歩いているだけの能無し」だと思っているし、邸でもそう言いふらした。

実際は、アルベルトのほうこそ、顔の良さ以外に突出したものない普通の令息な上に、ある意味貴族らしく愛人を囲い連れ回す不誠実な人間だ。

そんなことにもまだ気づけないアルベルトは、カッソカッソとハイヒールを鳴らすメーデアの足音に思考を止め、口元を緩ませた。

「まだお仕事の事を考えているのですか？」

「ああ、どうも調子が悪くてな」